OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	王充研究論考目録（一九六八年～八二年）
Author(s)	滝野, 邦雄
Citation	中国研究集刊. 1985, 2, p. 45-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61134
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

王充研究論考目録（一九六八年～八二年）

滝野邦雄

王充・『論衡』関係の研究文献の目録としては、すでに戸川芳郎氏のものがある（本目録・四、伝記・日本の1）。本目録は、同目録に続く一九六八年以後の論考についての目録である。

なお範囲は、王充または『論衡』を中心としたものに限った。また日本の論考については、不充分ではあるが、キーワードを収録するような形で内容を紹介する。

目　次

一、翻訳
二、考釈
三、札記類
四、伝記・解題
五、書誌
六、研究史
七、研究論文

凡例

一、関係論考は内容上から一～七の部門に分けた。各部門内の順序は〔中国〕〔日本〕とし、それぞれ発表順とした。

一、各論考の掲載方法は、次の通りである。

①論考の場合

「論考名」（著者名）『掲載雑誌・書名』発表年

②研究書の場合

『書名』（著者名・出版社名）発表年

一、中華人民共和国発表の論考は、ほとんど簡体字で記されているが、本目録では、日本の通行字体に改めた。

一、翻訳

〔日本〕

1、『論衡』上・中・下　（山田勝美訳・明治書院）　『新釈漢文大系』六八・六九・七〇　一九七六年・一九七九年・一九八四年

二、考釈

〔中国〕

1、『論衡注釈』　四冊　（北京大学歴史系「論衡」注釈小組、中華書局）　一九七九年

三、札記類

〔中国〕

1、「論衡対作篇《辞姦》当作《辞妍》説」　（趙海金）　『大陸雑誌』三八―八　一九六九年

2、「論衡説日篇《陸在察之若望》之《望》当作《属》説」　（趙海金）　『大陸雑誌』三八―九　一九六九年

3、「論衡案書篇《斉有三鄒衍之書》」　（趙海金）　『大陸雑誌』三八―十一　一九六九年

4、「論衡実知篇《聖賢之才能立也》」　（趙海金）　『大陸雑誌』三八―十一　一九六九年

5、「論衡対作篇《王尹》当作《王伊》説」　（趙海金）　『大陸雑誌』三八―十一　一九六九年

6、「光武紀与論衡之所謂《景天》即戒火草申義」　（陳槃）　『大陸雑誌』五二―六　一九七六年

7、「論衡札記」　（裘錫圭）　『文史』五　一九七八年

8、「読《論衡校釈》」　（蔣礼鴻）　『抗州大学学報』一九七九年一・二期

〔日本〕

1、「論衡正説篇論語章穏疑」　（宮崎市定）　『東方学会二十五周年論集』　一九七二年　（『アジア史研究』第五　同朋舎所収）

（武内義雄の『論語』の内容分析の研究のよりどころとなった『論衡・正説篇』の一章を再検討する）

四、伝記・解題

〔中国〕

1、「王充伝」　（陸暁松）　『学習与批判』一九七四年七期

2、「王充研究」　（潘清芳）　『国立台湾師範大学国文研究所集刊』二二　一九七八年

〔日本〕

1、「四庫全書総目提要《論衡》訳注并びに補説」　（戸川芳郎）　『お茶の水女子大学人文科学紀要』二十一　一九六八年

（四庫全書総目提要『論衡』についての訳注。補説は一九六七年以前の王充関係研究文献類目）

五、書誌

〔日本〕

1、「論衡の和刻本」（市川任三）『新釈漢文大系季報』六二　一九七九年
（論衡の和刻本についての概説）

六、研究史

〔中国〕

1、「試論三十年来王充的研究工作」（蔣祖怡）『学習与探索』一九八一年二期

〔日本〕

1、「陳海闊の《王充の哲学思想》をめぐって」（秋吉久紀夫）『目加田誠博士古稀記念中国文学論集』（龍渓書舎）　一九七五年
（陳海闊の論文が一九四一年に延安で発表されたことの意味を中心として）

七、研究論文（総数が多くないので、分野別に分類しないで一括しておく）

〔中国〕

1、「王充思想述評」（葉祖灝）『東方雑誌（復刊）』二―三　一九六九年

2、「王充教学思想」（王雲五）『東方雑誌（復刊）』三―十二　一九七〇年

3、「王充論衡」（陶希聖）『中央月刊』四―六　一九七二年

4、「従現代的儒法之争談到王充的法家思想」（郭紹虞）『学習与批判』一九七三年四期

5、「王充対孔丘及儒家学説的批判」（田文棠）『陝西師範大学学報』一九七四年七期

6、「王充的《論衡・問孔》篇」（師鍾）『北京日報』一九七四年七月二日

7、「王充的《実知》和《知実》」（師鍾）『北京日報』一九七四年七月十八日

8、「王充的《論衡・刺孟》篇」（師鍾）『北京日報』一九七四年七月三十日

9、「論王充的反儒闘争」（鍾達）『紅旗』一九七四年八期

10、「王充和他的《問孔》《刺孟》」（孫欽善）『北京大学学報』一九七四年四期

11、「読王充的《問孔》《刺孟》」（翟延晋）『学習与批判』一九七四年一〇期

12、「討孔的戦闘的檄文―読王充的《論衡・問孔》篇」（天津大沽化工廠工人評論組）『光明日報』一九七四年七月五日

13、「王充自然思想研究」（陳麗桂）『国立台湾師範大

学国文研究所集刊』十九　一九七五年
14、「王充論考」（徐復観）『両漢思想史』巻二（台湾学生書局）　一九七六年
15、「王充《論衡》的美学思想」（聶振斌）『美学』一九七九年
16、「王充哲学思想探索」（徐敏　生活・読書・新知三聯書店）　一九七九年
17、「王充反孔嗎？」（周桂鈿・王生平）『光明日報』一九八〇年一月十一日
18、「王充《效験》論浅析」（呉光）『社会科学研究（四川）』一九八〇年三期
19、「王充反対神化孔丘的一場謬論」（葛栄晋）『学習与探索』一九八〇年三期
20、「王充的文学理論」（蔣祖怡・上海古籍出版社）　一九八〇年
21、「王充的真美論与審美判断」（聶振斌）『中国古代美学芸術論文集』（上海古籍出版社）　一九八一年
22、「王充的美学思想」（施昌東）『漢代美学思想述評』（中華書局）　一九八一年
23、「王充及其《論衡》中的天文学思想」（劉文寛）『科学技術史文集』六　一九八二年
24、「王充思想剖析」（金春峰）『中国哲学史研究』一九八二年二期

〔日本〕

1、「東漢初期にあらわれた政治思想の一形態―王充歴史観剖析―」（戸川芳郎）『中国古代史研究』第三　一九六九年
（王充の政治思想は、現国家体制を保持する劉漢政権の歴史的優越を証明する目的を持っていた）
2、「王充の薄葬論について」（佐藤匡玄）『愛知学院大学文学部紀要』一　一九七一年
（王充は、その無神論の立場から、薄葬論の理論的裏づけを確立しようとした）
3、「《論衡》答佞篇について」（大久保隆郎）『福島大学教育学部論集（人文科学）』二十三―二　一九七一年
（「答佞篇」は、「定賢篇」で展開される賢人論の前段階の思想を示すものである）
4、「王充における批判の哲学」（頼芳樹）『広島大学教育学部紀要（第二部）』二十　一九七二年
（王充の思想についての概説）
5、「《論衡》習俗批判考」（大久保隆郎）『福島大学教育学部論集（人文科学）二十五―二　一九七三年
（当時の風俗・習慣を王充がどのような立場から批判するかを示す）
6、「後漢礼教主義の一側面―《論衡》習俗批判の分析―」

（大久保隆郎）　『漢文学会会報（東京教育大学）』三十二　一九七三年
（王充の習俗批判は、禁忌に淵源を認めることから徹底性を欠く）

7、「《論衡》の論理について―死生観を中心に―」（鵜田勝義）　『フィロソフィア』六十二　一九七四年
（王充の論理は道家的自然観に基づくものと、儒家的天命観に準拠したものと常識的で即物的現実重視の方向で合理的考察を行うものとという三つに分類できる）

8、「王充の法家批判―《非韓篇》分析―」（大久保隆郎）　『福島大学教育学部論集（人文科学）』二十六―二　一九七四年
（王充は、法家の批判を通じて、人間不信の上に成り立つ法家理論に信ずべき人間の存在と尊厳を注入し、法家と儒家の調和の上に人間存在を見ようとする）

9、「論衡余説」（大久保荘太郎）　『羽衣学園短期大学研究紀要』十二　一九七五年
（今日の王充研究に対する筆者の疑問を示す）

10、「王充の妖祥論」（大久保隆郎）　『福島大学教育学部論集（人文科学）』二十七―二　一九七五年
（王充は妖祥などを合理的に解釈し、神秘的呪縛から人間の解放を目ざした）

11、「王充の性論についての一考察」（古川浩子）　『中国古代史研究』四　一九七六年
（「性」の助長のため人力をつくすことを王充は重視。そのため「命」と「性」の無関係を説く）

12、「王充の《神人の分》について」（吉田照子）　『哲学（広島）』二十八　一九七六年
（王充は人間は聖人といえども神にはなれないという神人の分を明言したとし、そこから派生する問題を考察する）

13、「王充とその鬼神観」（西岡弘）　『国学院雑誌』七十八―八　一九七七年
（王充は死後の知覚やその作用、また鬼神を否定した結果、薄葬を主張）

14、「桓譚と王充（一）」（大久保隆郎）　『福島大学教育学部論集（人文科学）』三〇―二　一九七八年
（王充は桓譚の神仙批判を継承し、体系的なものにしただけでなく、王充独自の死生観をも導き出した）

15、「《論衡》における《命》の性格―気と連関して―」（吉田照子）　『福岡女子短大紀要』十五　一九七八年
（王充の命定論は、気を根底とし、人間を広く自然界の中でとらえなおし、その上、人間を認め、天人連続を認識する新展開を示す）

16、「桓譚と王充（二）」（大久保隆郎）　『福島大学教育学部論集（人文科学）』三十一　一九七九年

（桓譚の死生説の解明と、王充がそれをどのように継承深化したかという点の考察）

17、「王充の陰陽五行観について」（清水浩子）『大正大学大学院研究論集』三　一九七九年
（陰陽五行は万物を生成する元素であるが、万物を循環交代させる力は陰陽の消息にあり、五行にはない）

18、「王充の政治思想」（吉田照子）『哲学（広島）』三十一　一九七九年
（王充の批判主義と命定論それと頌漢論とがどう関連していたかについてを考察）

19、「王充の養生論」（鬼丸紀）『中国哲学（北海道大学）』九　一九八〇年
（王充の生命観と養生論について検討し、それらが王充の本来的な考え方であることを論ずる）

20、「王充《論衡》の思想における批判的合理性と科学的思惟との関連をめぐる若干の問題について」（堀池信夫）『中国文化（筑波大学）』　一九八一年号
（王充の天人感応批判と宿命論とは、自生自化〈無為〉の思想を基盤に据えることによって簡単に整合される）

21、「桓譚と王充（三）―祭祀観の継承とその展開―」（大久保隆郎）『福島大学教育学部論集（人文科学）』三十二―三　一九八〇年
（両者の祭祀観は、祭祀と禍福を切りはなした点で共通するが、王者と祭祀の問題は、桓譚は批判するのに対し、王充は道徳的意義を認めて肯定する）

22、「鬼神について―《論衡》を中心にして」（清水浩子）『大正大学綜合仏教研究所年報』三　一九八一年
（王充は薄葬を主張するため鬼神について論じ、鬼＝死霊という考えは否定するが、「伝説の中に存在する鬼」は否定しない）